

特集
大分
豊の国 地域社会の未来像

Special Features
OITA
Local Communities in Future in the Country of Affluence

国際化

Globalization

小さな地球「立命館アジア太平洋大学」

地域と世界を結ぶプラット・ホームをめざして

澤田 功

SAWADA Isao

立命館アジア太平洋大学/事務局長



1—日本と世界の学生が市民とともに暮らし学び合う街・別府

温泉地としては世界一の規模、湯煙と緑の豊かさが印象的な観光都市・大分県別府市。どこに行っても学生と会う。その国籍も言葉も文化も習慣も様々である。

買い物や食事に行くと、アルバイトをしている学生たちと会う。キャンパスや各地域のイベントには、必ず各国料理の模擬店が並び、舞台では民族舞踊や音楽、民族衣装のファッション・ショーが演じられる。小学校などでは「国際理解教室」が開かれ、学生たちが子供たちに、自国の料理を披露し、簡単な言葉を教え、自分たちの文化、習慣、地理などを語っている。週末や長期休暇などには、多くの留学生が、ホームステイで日本の文化や習慣を直接肌を感じている。福祉施設などにも学生たちのボランティアが見られる。

これらの交流には、留学生とともに多くの国内学生や教職員も参加している。

このような交流の中で、別府の人々も様々な国・地域の文化や言葉、習慣に触れ、理解し合う。時には文化や考え方の違いに戸惑いながらも、グローバル化が進む世界に、改めて目を向けられる「きっかけ」となっているに違いない。

今、人口12万人強のこの街に、立命館アジア太平洋大学(以下、APUと言う。留学生約1,900名弱を含む学生数約4,400名)と他大学の留学生、合わせて約2,400名が、多くの国内学生とともに学び暮らす。留学生数は、実に人口10万人当たり約2,000名になる。留学生数が一番多い東京と比べても人口比では一桁違う。

2—広がり発展する交流

これらの交流は、二つの大きな方向で発展し続けている。

ひとつは、異なる国々の学生同士や学生と市民が互いに交流、理解し合う関係から、さらに進み、互いに協力し、ひとつの目標に向かっていく取り組みが始まっていることである。

学生・教職員が参画する新しい「街づくり」や「地域振興イベント」などの取り組みを、挙げることができる(北浜、亀川、鉄輪地区などの商店街の人々と協力した「街づくり」、浜脇地区でのAPU観光学ゼミによる「観光振興」に関する調査、APU学生が市民の協力を得て開催する「国際スポーツイベント」など)。

もうひとつは、これらの交流や取り組みが、大分県レベルや県内市町村、さらには県外まで広がりつつあることである。

昨年4月に、日本学生支援機構大分支部や大分県、地域の人々の支援を受け、県下の大学



■写真2—晴れた日のキャンパスからは高崎山・別府湾が望める

が参加した「大学コンソーシアムおおいた」が発足した。このコンソーシアムの当面の重点課題は、学生を豊かな発想と能力を持つ人材と捉え直し、インターシップやボランティア、貿易アシスタント(企業の海外との協議等をアシスト)、フィールドワーク(地域や自治体の要望に応えた調査)などの様々な形で、自治体や企業、各種団体の現場で活躍してもらい、一層地域と深い関係を築いていこうというものである。事務局は、日本学生支援機構、大分県、APUの職員で構成され、コンソーシアムの発展に尽力している。

APUは、大分県と連携交流協定を、別府市および別府市商工会議所とは三者間の友好交流協定を、臼杵市、旧三重町(現豊後大野市)、旧蒲江町・旧鶴見町(現佐伯市)と友好交流協定を結んでいる。さらに、中津市や日田市、遠くは長野県飯田市、青森県などとも協定締結の協議が始まっている。

これらの交流内容は、市民・小中学生との交流(イベント参加や国際理解教室など)や学園祭への参加など、共通点もあるが、各地域の特性に合せた特色あるものも多い。

臼杵市では、観光振興や防災を担当する職員とAPU教員による「臼杵学」講座を、APUの専門教育科目として開講し単位認定する。これは、教室での講義だけでなくフィールドワークを行う「生きた授業」をめざしている。旧三重町では、留学生2名に対し毎年「ふるさと大使」(奨学金支給)に任命し、長期休暇を利用したホームステイと市民交流を実施している。また、観光分野の教員とゼミ生が観光振興策をまとめ町長に提言した。さらに、この長者伝説と韓国のある地方の伝説に共通性が多いことが分かり、APUの伝承文化を研究する教員とゼミ生が、町民研究者とともに、時には韓国まで出かけ研究を続けている。旧蒲江町・旧鶴見町などでも、それぞれ特色ある取り組みが進んでいる。

さらに、長崎の高校の招待による年1回の交流や、福岡でのイベントへの招待、遠くは広島からホームステイの申込みなど、国内での交流は様々な形で広がり続けている。

3—「世界学生観光サミット」と「全国まちづくり交流大会」の連携をめざして

今年の11月、APUと大分県と別府市は、共同して「世界観光学生サミット」を開催する。これには、世界と日本の「観光振興」に関わるキーパーソン、研究者、学生、観光業関係者約1,000名が参加する予定である。参加者は、九州の各観光地を視察した後、別府市に集い、「観光のDynamic(原動力)、Sustainable(持続可能な発展)、Boundless(境界を越えて)」をテーマに、ディスカッションを行い、学術的な視点からの提言発表も予定している。これは、グローバルな視点から「観光振興」のあり方を探求するとともに、別府・大分・九州の魅力の世界に発信することを目的にしている。



■写真1—APUキャンパスのシンボル・ツインタワー



■写真3—友好交流協定を結んだ鶴見町の小学生とAPU留学生の交流事業(スリランカカレー作り)



■写真4—友好交流協定を結んだ臼杵市の祇園祭りに参加する留学生たち

同時期に、別府市の地域再生計画「ONSEN ツーリズム」主要事業として「全国まちづくり交流大会」が開催される予定である。これは、全国からユニークな発想と行動力で「まちおこし」に取り組む人々を招いて、観光と地域再生の取り組みを交流し、別府観光の浮揚策を探るものである。

今、この「世界学生観光サミット」と「全国まちづくり交流大会」の合流が検討されており、一大イベントとなることは間違いない。ここで生まれた成果とネットワークが参加者に継承され、来年以降に他の国・地域で引き続き開催されることを期待している。

4——大分・別府とAPUに集う日本と世界の人々

地域での様々な国際交流が展開される中、大分・別府とAPUには、駐日各国大使やアジア諸国からの首脳などが多く訪れている。この背景には、大分県が、従来からアジア・ローカル外交を積極的に進めて来たことがある。

同時に、APUに世界から集う学生たちが、自主企画で自国の大使などを招くことも多い。また、駐日大使が、APUに自国の学生がいることを知り、来学されることも多い。

さらに、海外進出企業の多くの人事担当者が、企業説明会や採用面接、インターシップの募集などのためにAPUを日常的に訪問される。これをAPUでは「オン・キャンパス・リクルーティグ」(2004年度180社以上)と呼び、企業のニーズに対する学生のマッチングなど様々な努力をしている。これはAPUの学生が、キャンパスや地域での交流と学習を通して国際感覚と専門的力量を身につけていること、さらに、国内学生と国際学生が切磋琢磨する中で、それぞれの積極性を学び合い、自己表現力やプレゼンテーション力、実務力、組織力を高めているこ

となどが、企業にとって、これからの発展に必要な人材と受け止められていることの意味であろう。おかげ様で、APUの一期生の就職希望者の就職率は95%、国際学生の日本企業就職希望の就職率は100%であった。二期生のそれは、97%を越えている。新設大学としては画期的な数字と言えるであろう。

また、地域の市民・小中学生の訪問も後を絶たない。APUの食堂には、各国・地域の料理が並び、多くの市民が訪問され景観と食事を堪能されている。また、多くの小中学生が課外授業として来学し、留学生や外国籍教員に突撃インタビューをしたり、サインを求めたりしている。これもささやかであるが大切な国際交流である。彼らは、これをきっかけに将来、外国人に物怖じをしない国際人として育つ可能性があるからである。

5——小さな地球「立命館アジア太平洋大学」の誕生

前述してきた地域と大学との新しい交流の展開は、小さな地球「立命館アジア太平洋大学」の誕生が契機となった。

別府湾を一望する高台にAPUが開学したのは、2000年4月。現在、75カ国・地域からの留学生(APUでは国際学生と言う)1,855名と全都道府県からの国内学生2,562名が学んでいる。教員の半数も外国籍であり、キャンパスはまさに多文化・多言語があふれる「小さな地球」と言える。

APUは、学校法人立命館が大分県と別府市からの多大な「公私協力」と、国内外の広範な人々の協力を得て開設した大学である(二学部・入学定員890名)。

1995年9月公表したAPU設置構想の最大の特長は、学生の半数を世界50カ国・地域以上からの国際学生とする点にあった。学生たちが、国境を越え、共に学び、生活をし、相互の文化や習慣を理解し合い、21世紀に

おいて平和的で持続可能な国際社会の発展を担う有為な人材として成長することをめざしている。また、アジア太平洋地域の未来創造に貢献するアジア太平洋学の構築をめざしている。まさに、日本にかつて無かった国際大学の創設であった。

この大学の創設に当たっての最大の難問は、如何にして優秀な国際学生を毎年400名以上海外から集めるか、であった。そのためには、①言語の壁を低くする、②経済的援助策を確保する、③大学へのアクセスを容易にする国際的ネットワークを開拓し、来日することなく入学可否と奨学金額を提示する、④多文化なキャンパス環境と地域との関係を活かした多様な教育を行う、⑤進路・就職を如何に支援するか、であった。そして、国際大学を標榜する以上、いかに世界的なネットワークを有しても、地域に根ざし、その国際化に貢献し支持されていなければ本当の国際大学と言えないということであった。

①は、英語が日本語かいずれかの能力と基礎学力があれば入学を許可することで解決した。とくに、80%弱の国際学生が英語で入学してきたことは、今までに無い留学生層の受入れ、75ヶ国・地域からの学生受入れ、95%以上の海外からの直接入学などに結実している。しかし、それは、年2回の入学・卒業、日英両言語教育、900室の寮建設と管理運営など新たな課題を私たちに課した。その課題の充実は今も続いている。②は、大学の基本構想に賛同する企業からの奨学金寄附(サポーティング、約38億円寄附申込み)、政府系や自治体、民間の奨学金で解決した。しかし、給付制奨学金のため、新たな奨学金の獲得が緊要の課題となっている。③は、立命館教職員が開学前の3年間だけで、海外の中等教育機関・高等教育機関1,200以上を訪問し、はじめての海外業務に悪戦苦闘しながら解決した。現在、APUが有する中等教育機関との協力協定は約400機関、大学・研究機関との協力協定は、160機関を超えている。④は、多国籍な教員による教室の中での授業と、前述した地域やキャンパスでの異文化間交流、フィールドワーク、学生が互いに学びあうシステムなどであるが、これをさらに進めることが重要な課題となっている。⑤は、一回生からのキャリア形成プログラムや業界別講座、そして、前述の「オン・キャンパス・リクルーティグ」で順調な成果をあげている。

前述した如くであるが、文化や習慣の違いによる様々なトラブルもまだ多くあり、これらを解決することが課題である。

以上のように、APU創設の課題をすべて完遂できてい

る訳ではない。私たちは、初期の基本目標を達成したに過ぎない。私たちの前には課題は山積している。

6——APUのこれから

今、APUは「ニューチャレンジ」と呼ぶ第二段階の取り組みを進めている。それは、①今日の日本と世界のニーズに応える教育・研究分野の拡大、②地域との交流の拡充を含めた一層の学生生活活性化、③大学院と研究の高度化、大学院学生の進路・就職開拓、④国際協力事業(海外からの研修、短期留学の拡大、ネットワーク型教育・研究の拡充)の一層の拡大、⑤奨学金の新たな確保と新しい奨学制度の確立、⑥学生数の拡大、100カ国・地域から国際学生の受入れと財政の確立(未だ赤字ですから)などである。これらの課題は、地域と国内外の広範な方々の一層の支援・協力がなければ成し得ない課題である。

APUは「小さな地球」として世界の平和と人類社会の進歩・福祉に貢献したいと願っている。それが、本来の高等教育機関としてのミッションであると考えられる。



■写真7—毎年秋に開催される学園祭「天空祭」



■写真8—新入生歓迎企画「新歓祭」-和太鼓サークルのパフォーマンス



■写真5—学生サークル「PRENGO」のタイ訪問(現地の小学生との交流)



■写真6—学生団体ISEが企画・実行したスポーツ大会